

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
昭和二年三月二十八日印刷共本

昭和二年四月一日發行
(一月一回)

山とスキー



第七十一號

札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號一十七第

.....

記事

スキー遠距離飛躍と其の力學に就て(承前)

R. Staumann
青木信三 杉山又雄抄譯

〔一〕

登山史上の人々(承前)

大島亮吉

〔六〕

—エドワード・ウィンパー小傳—

天鹽岳と北見峠附近

原忠平

〔二〇〕

國際スキー聯盟主催

一九二七年國際スキー大會

於コルチナ

木原均

〔二八〕

彙報抄録

スキーテクニツクの研究

廣田戸七郎

〔一〕

寫眞版

コルチナの大會にて

樺太春日峠

昭和二年四月發行



コルチナの大会にて

スキー遠距離飛躍と其力學に就て (承前)

R. Staumann

青木信三 杉山又雄 抄 譯

次に其例をかゝける。

最初の速度 $V_0 = 22\text{m.}$

ジャンツエの傾き $\beta_0 = 5^\circ$

スキーを含むジャムバアの重さ 80kg. ジャムバアの表面積を 1m.^2 とす。

次の表に航空力學の因子を書抜いて置く。これは Wengen のジャムプ競技會の時に測定されたものである。

$a =$	10°	30°	60°	90°
$k =$	0.06	0.073	0.073	0.08

$$R_0 = 22^\circ \times 0.06 = 29$$

$$A_1 = 29 \times \cos 15^\circ = 28$$

$$Q - A_0 = 52$$

$$P_1 = 52 \times \cos 5^\circ = 52$$

$$v_0 = \frac{52}{8.15} = 6.4$$

$$t_1 = \frac{20}{22} = 0.91$$

$$l_1 = 3.4 \times 0.88 = 2.8$$

$$g_1 = 0.91 \times 6.4 = 5.8$$

$$W_1 = 29 \times \sin 20^\circ - 52 \times \sin 5^\circ = 5.4$$

$$W_1 = \frac{5.4}{8.15} = 0.66$$

$$V_1 = 22 - 0.66 \times 0.91 = 21.4$$

$$\text{tg } W_1 = \frac{5.8}{21.4}$$

$$W = 15^\circ$$

$$\beta_1 = 5 + 15 = 20^\circ$$

同様にして

$$l_2 = 2.7$$

$$\beta_2 = 34^\circ$$

$$V_2 = 21.2$$

$$l_3 = 2.6$$

$$\beta_3 = 55^\circ$$

$$V_3 = 21.4$$

もしジャンツエから 50m. の所でランディングバーンが $3\frac{1}{2}^\circ$ の傾きがあるとすると、降下角は

$$P_3 - 35 = 20^\circ$$

$$V_3^2 \times \sin 20^\circ = 156$$

故にジャムバーは六十米では立ち得ない。以上に示した例はユングフラウシャンツェの關係に一致して居るのである。

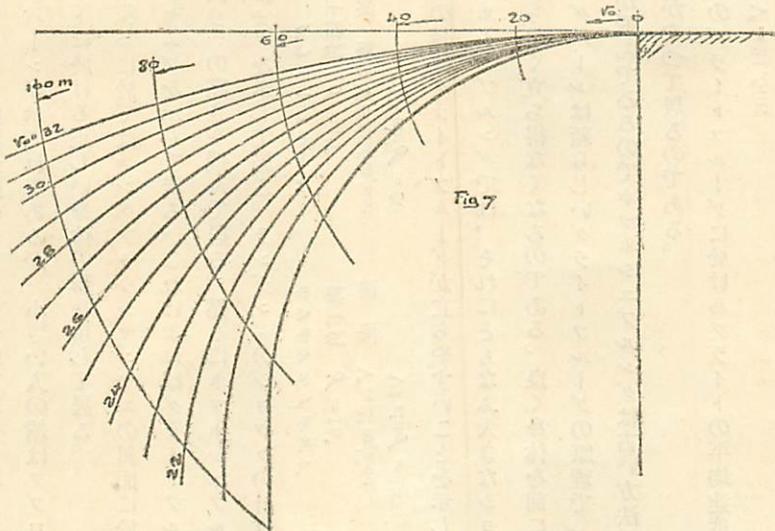
シャンツェの作り方

以上でお解りの如くに、グライトフルーグ (Gleitflug) 滑らかに空中を滑つて行く飛躍 (の原理によつて身体を前に傾けるジャムプテクニクには別の新しいランデングバーンが必要となつて来る。先ず始めに次の事が定められねばならぬ。その斜面でどれ程の距離を飛び得るかと云ふ事である。前に述べた計算法によつて求めたフルーグバーン表 (Table) は斜面が $35^\circ \sim 37^\circ$ の時最高の距離のジャムプが出来る事になつてゐる。

このフルーグバーン圖は結局ランデングバーンの縦断面となるのである。最長の飛躍距離の點から云へば、ランデングバーンとアプローチは同じ曲線となつて居なければならぬ。故にシャンツェは次の様に作られねばならぬ。即ちランデングバーンの初めの點 (即ちシャンツェの根もと) で $2 \sim 3$ m 高くもりあけられて、それに續いて後の方へ $10 \sim 15$ m まで延されて $30^\circ \sim 40^\circ$ の傾を持つてゐる。この程度の傾斜は是非とも必要なものである。なぜならば遠距離飛躍にはアプローチの速度 $22 \sim 30$ m/sec が是非とも必要なものであるから。アプローチがこの様に設計せられるならば、フルーグバーンの降下角はランデングの點に於て非常に小となるのである降下角は規則としては 9° である。但 30 m 以下のジャムプでは 15° まで許される。Wengen に於ける觀察によつて計算した結果

$$V_2 \sin \phi \leq 150$$

でなければ立ち得ないと云ふ事がわかつた。但し V をランデングの瞬間のジャムバーの速度 ϕ をフルグバーンの降下角 $30 \sim 30$ m のジャムプではランデングの時の速度は約 23 m/sec 正しく設計せられたシャンツェではこんなジャムプの時の降下角 $15 \sim 15^\circ$ 故に立ち得る確かさは



$$V^2 \sin^2 \theta = 53 \times 0.08 = 529 \times 0.08 = 42.5$$

故にランデングの時のショックは小さいから従つてこんな遠距離のジャムプでも立ち得るのである。Wengen に於ては更に

$$V^2 \sin^2 \theta = 140$$

のジャムバーでも頑張れば立ち得るであらう。100mのジャムプも全く同じ関係のもとに計算されるのである。こんな大きなジャムプに適する様に正しくシャンツェが作られるためには降下角は最大限 θ_0 。ランデングの時の速度約 $24 \frac{m}{sec}$ でなければならぬ。然る時は $V^2 \sin^2 \theta = 46$

$V^2 \sin^2 \theta$ の値を更に大きなジャムプの距離について計算すれば次の結果を得る。即ち上述の如き原則に従つて設計せられた正しい傾きのシャンツェでは實際に飛び得る最大飛躍距離はランデングの時のショックによるのではなくて、ランデングの瞬間の速度によつて制限せらるべきである。(この速度にはその二乗に正比例する空氣の抵抗あり。)

以上に述べた建設の原理に地形の關係が入つて来るから、この二つの因子を特別に研究せねばならない。

アプローチの速度からフルীগバーンを求めて、それに相當するランデングバーンを選ばねばならぬ。

Fig. 8 は遠距離飛躍のバーンの一例である。種々異つたフルーグバーンが示されてあるが、小さい人の繪はアプローチ及フライトに於ける正しい身体の形を示して居る。

Fig. 9 に於てはユングフラウシャッツエの斜面に於ける二つのジヤムプを示して居る。これによればグライトフルーグでは最高 2m. の高さを飛んで居る。然るにホツホシユブルングの高さは 4m. を示して居る。ランディングのシヨツクの計算は

グライトフルーグ

下降角 $\phi = 10^\circ$

速度 $V = 22.5 \text{ m/sec}$

$V^2 \sin \phi = 80$

ホツホシユブルング

下降角 $\phi = 18^\circ$

速度 $V = 21 \text{ m/sec}$

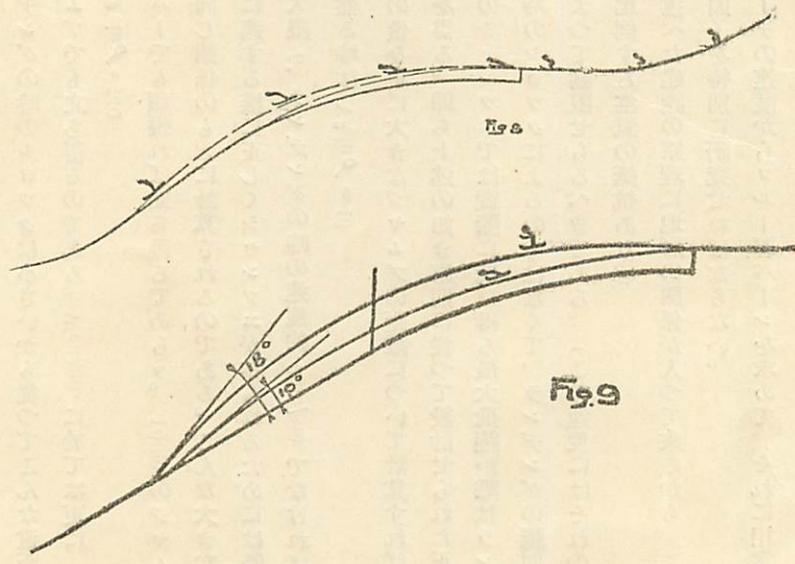
$V^2 \sin \phi = 137$

この價はグライトフルーグが立ちやすいことを示して居る。ホツホシユブルングでは、それにとりもなふ大きなシヨツクがあるから早く立ち得なくなるのである。良く身体を前に傾けたフルーグバーンは新らしいグライトフルーグの原理で Willemmer が飛んでゐるのでホツホシユブルングは古い方法で Laner がやつて居るのである。

このグライトフルーグに於けるフライトの平均速度

$V = 21.5 \text{ m.}$

前に掲げた表の示す航空力學の因子を利用して計算したフル



1. グバーンと實際測つたフルーグバーンとは良く一致した結果を示してゐる。

計算によるフライトの時間 2.36sec

測定によるフライトの時間 2.4 sec

この結果の一致から安心して上述の因子をフルーグバーンに適用し得るのである。

この方法により計算せられ而して建設せられた初めのシャンツェは Langenback に於ける Erzenberg Schanze である。これは最大飛躍距離 50m. として計算によらなかつたならば次の事實は不可能であつたらう。1926. 1. 24. のジャムプ大會に於て非常なぬれた雪で、しかも雪が少なかつたにかゝわらず Wilhelmier 及び Girardilla はこのグライトフルーグの技術を應用して 50m. のマークを飛び超えたのである。この事實は遠距離飛躍用のシャンツェとしての建設方法及び行はれたジャムプの技術が如何に正しいかの證明である。

抜 華 後 記

1. 遠距離飛躍として新しいジャムプテクニクが生れ出た。それはグライトフルーグの原理によつてジャムプを長くするために生ずる空氣の抵抗を航空力學的の浮力におきかへるものである。

2. ランデングの時のショックを最少にするために、ランデングバーンを最長のフルーグバーンを飛び得るものを選ばねばならぬ。

3. 新しい遠距離ジャムプのテクニクは航空力學に其基礎をおく。

4. フルーグバーンの計算の一つの方法を示して居る。

5. 其基礎に航空力學的の因子をもつ計算は Wengen に於けるフルーグバーンの測量でその正しさを證明確定せられた。

6. それは正しい遠距離飛躍のシャンツェの一つの指導的の例を與へて居る。

登山史上の人々 (二)

エドワード・ウィンバー小傳

大 島 亮 吉

斯くて此の災禍後二時間以上ウィンバーは兩タウグワルダーも又墜落する事を豫期した。何故ならば彼れ等は全く氣力を失つて仕舞つたからであつた。漸く岩にロープを引掛けては確保して彼れ等は午後六時頃にツェルマットへ下る山稜上の雪に達して、總べての危険は終つた。彼れ等は屢々彼れ等の不幸なる同行者の痕跡を見出さうとしたが、其の効も無かつた。彼れ等は叫んだ。然し又勿論の事其の答も無かつた。又其時であつた。彼のウィンバーの記する所に依るとリスクの上上空高くに巨大なる半圓が現はれて、又其の中に二個の十字架が明確に映じたのであつた。ウィンバーさえも其の不可思議な天象が何等か其の災禍と關係がありはしないかと思つた程であつた。其の光景は後ウィンバーの筆にて描かれて彼れが著書の一頁を飾つて居る。斯くして彼れ等は其夜は山上の見すほらしき岩の棚の上に明して、其の翌日無事ツェルマトに下つたのであつた。

斯くしてマッターホルンの初登頂と其の災禍の大要は記し終つたが、然し乍ら更らに其の最後にウィンバーの其れに對しての後想なるものを附け加へ度いと思ふ。其れは洵に筆を執りては餘り優れたる才能ありとは言ひ難き彼れをして、山岳文献上からも不朽の章句として認められて居るものである。即ちウィンバーは誌して曰く。

『斯くしてマッターホルンの傳説的な不可登な事實は打ち克たれた。そして其れに對してはもつと眞實性のある傳説が

置き換へられて仕舞つた。誰れか又此のマッターホルンの誇れる絶壁を攀ずる可く企てる者はあらう。然し誰れに取つても、其の山は、其れが最初の登攀者に取りて在りし如き山では在り得ないであらう。誰れしも其れが山頂の雪は踏み得よう、然し誰れも、其の山頂に立ちて最初に其處の驚く可き展望を眺めた時の心境を計り知る事は永久に出来ないであらう。そうして、私は信ずるが、誰しも此れ程瞬時にして悦びが悲しみと變り、笑ひが悼みと變じたと言ふ経験を語る可く餘儀無くせしめられた者は恐らく永久に無いのであらう。此のマッターホルンは頑固な敵であつた。長い間抵抗した。多くの痛撃を其の登山者に與へた。然し終ひに此の山は誰れしも豫期しなかつた平易さを以つて、然れども無慈悲な敵として——破られた。征服はされた、然し其れは撃破されはしなかつた。其れは恐る可き彼の復讐をやつたのだ。此のマッターホルンが崩れ去り、唯だ形もない岩片の堆積のみを除いては、何物も此の偉大な山岳が嘗つては聳立せしと云ふ個所を示さない様な時も來り得る。一原子づゝ、一吋づゝ、一碼づゝ、此の山も、何物を抗する事の出来ぬ力の爲めには服従して行くのだ。其の時は未だ遙か遠い。其れ故此の後、尙生れ來る多くの人々は、此の恐ろしい絶壁を打ち眺め、其の類ひなき山容に驚く事だらう。然し乍ら此れ等の心は高められるだらう。そして彼れ等の此の山に對する期待は誇大されるかも知れないが、然し誰れしも失望して下り來る者はないだらう。(Ibid. Chap. XIII.)

マッターホルンの初登頂に伴つたアクシデントは思ひ掛けなく、世に激しい影響を惹起した。そして、其の前の七月二十一日に、ウインバー、タウクワルダール父子の如きは當時瑞西のヴィエージュ區 (district de Viège) の豫審裁判の審問を受けて、此のアクシデントに就いての真相を審査される事に爲つた。其れに關する記録の如きも、ジュネーヴの書肆ジュリアン (Ribrantie A. Jullien, Genève.) の出版した *Scrambles amongst the Alps, in the Years 1860-69* の佛蘭西譯新版 *Escalades dans les Alpes de 1860 à 1869*. (1922) の附録に收められてある。斯くして又ウインバーは世間からの毀譽ある批評を受け、一部からは辛辣なる非難を蒙つた。そして彼れは、剛毅なる彼れは、完全に沈黙して其れ等世評を甘受して居た。ラスキンスへも當時に於て此の事の渦中に入つて居る程である。(Gesamte and Lilies 第三版 (1865) 序文參照) そして其れから七年

の後なる一八七一年に、彼れは始めて一書を以つて彼れの心胸に燃ゆる所の全部、其の真相の巨細を云はんと欲して彼の Scrambles amongst the Alps in the Years 1860-69 を著し、以つて世に答へた。先きに譯した彼れの マッターホルンの記述の断片の如きも、其れ故決して登攀直後の亢奮的な口調を以つて書かれたものでなく、數年間の靜思默想の後に於て爲されたものである事は、其れを精讀すれば直ちに吾等の感ずる事である。如何に彼れは周到に、確實に、深く其れを精叙して居るかを讀者は知られよ。(註)

【註】 ウィンバーはマッターホルン災禍の後一週間はツェルマットにて前述の如く官憲の審問の爲めに滞留し、而る後インターレーケンに赴き、同地にて瑞西山岳會年報に同災禍の真相を掲載せんとの意圖を以て、當時瑞西第一の登山者たりし彼のエドムント・フォン・フェレンベルクに宛て書信を送つたが、其れは或る理由を以て掲載せられなかつた。其の理由を後ハイリッヒ・デュビイはアルヒナ誌(一九一一年二三頁)上に於て簡明したと謂ふ。而して同書信のコピイは伊太利山岳會の名譽書記宛に又送られて、伊太利語に翻譯せられて G. A. I. Boll. No. 1, p. 20 に掲載せられた。インターレーケンより英國に歸りてウィンバーは災禍後三週間の間沈黙して居たが、終ひに當時の英國山岳會頭たりしアルフレッド・ウィルスの懇切なる奨めに依り、公式の報告を誌して同災禍の真相を又一部公衆に知らせた。同報告は後ジョン・メーシイ・フアラのノートを附して A. J. Vol. XXXIII. pp. 234-50 に再録せられた。以上はウィンバーが彼れの著書 Scrambles amongst the Alps を世に公けにする以前に於て同災禍に就て發表せし記録の總べてである。尙ほ此の他に同災禍に關して權威ある著書はウィンバーと共にツェルマットよりハドソン・ハドウ、クロッツの遺骸の捜索に従事せるハドソンの友 Rev. Joseph Mc Cormick の同災禍に就ての著 'A. Stad Holiday' である。

此の マッターホルンの初登頂を以てウィンバーのアルプスに於ける重要な登山は事實上終りを告げたのであつた。其の翌年一八六六年には氷河に於ける雪が氷に成る經過と氷河の脈理組成を研究する爲め八月二日より九日迄コル・ド・ヴァ・ヴェルベルリイネの頂上のネヴェに溝を掘る作業の爲めに三人の人を伴ひて過ごした。彼れの其の仕事の結果は 'Scrambles' の附録第一、四二六—三二頁の 'Stratification of Snow and Formation of Glacier Ice' と成りて顯現せられて居る。其の間彼れの研究は天候の不良に苦しめられ、峠に登る事二回、峠を越ゆる事二回、而して Tete de Velpeline の初登頂を爲した

(Scrambles, p. 157 note 参照)

一八六七年にウィンバーは最初のグリーンランドを探險に行つた。これは彼れの少年時代より憧憬せる極地探險に對しての具体化したものとも見られ得るのである。即ち彼れは六月十六日 Taoshavn に到着したが、土人の肺炎に侵さるゝ者續出せると共に他の困難なる事情ありて同地に長く停滞した。而して漸く七月二十日五人の土人と橈と曳犬を伴れてボートにて出發した。七月二十二日にグリーンランドに上陸し、七月二十四日 inland ice の一端に達し、同二十八日には島の内地に向つて出發せしが、然し時期既に遅く氷河上の積雪が全然融けて仕舞つて居たので進行不可能と爲り、止む無く計劃を放棄して、一先づ Taoshavn に歸り、八月十九日再度準備を整えて出發、同月二十二日化石の森林と稱せられて居る Atanekerdluk に到り、同地に三日間滞在して資料を蒐集し、八月二十五日、二十六日は Hizo 島に渡りて又化石の蒐集を爲して、二十七日 Atanekerdluk に歸り、九月三日、四日に Godhavn へ渡りて九月十日コペンハーゲンを去つて歸英した。ウィンバーは此のエキスペディションに就て詳細なる報告を誌めて British Association Reports, 1869, pp. 1-8 に掲載し、又アルバイン・クラブにてグリーンランドに就ての講演を爲した。(A. J. vol. v. pp. 1-23 参照)

一八六八年に於てはウィンバーはアルブスを訪ふ事無く、一八六九年には僅かの旅行を爲したが、其れは コル・ド・ロウタレを越え、デユランス谿谷の洪水の後を視察し、モン・セニイ墜道を再訪したに過ぎず、一八七〇年もアルブスを訪ふ事無く、一八七一年にはモン・セニイ墜道の開通式に赴いたのであつた。此の年彼れは初めて彼れの著書を上梓した。

一八七二年に到りてはウィンバーは彼れが第二回のグリーンランド探險を行つた。即ち彼れは此の探險中一人の仲間も無く、Disco 島を巡航し、Umanak 峽谷の北側迄も處々上陸し、海邊を傳ひて探險し、Mousok 半島の Karkasok と Umanak 峽谷の Kateringovit に登つた。歸英後、彼れはアルバイン・クラブに於て 'Some Notes on Greenland and the Greenlanders' と謂ふ表題にて講演を爲し、兩回の探險の成果を報告した。(A. J. vol. V. p. 161, 203 参照) 而して又此の兩回に亘りての探險中ウィンバーは多くの貴重な、動物學的な化石と礦物學的な蒐集を得て來た。彼れの此の時の蒐集物の總べては現にブリッティッシュ・ミュージアムに藏されて在る。一八七四年には寫真撮影の目的を以て八月十二日マッターホルン

に登頂し (Jahrbuch des S. A. C. vol. X pp. 261-71 参照) 同月二十四日にはアルベンヨホ (Arbenjoch) を発見して、其れに登った。(ウィンバーのノート A. J. vol. III p. 132 所載参照) 又一八七六年にもツェルマートに來り、嘗て一八六五年七月十三日十四日に野營せしテントの場所を訪ねた。其れから次ぎに彼れの試みた大きなエクスベディシンは、一八七九年から一八八〇年に掛けて試みられた。有名なエクスアドルとアンデスの探險であつた。此の時彼れは、嘗て一八六五年マッターホルンの初登攀に際して、互ひに其の名譽をば相競つた所の、彼の伊太利はヴァルトウールナンシニ (= Valromanche) の案内者ジャン・アントアヌ・カッレル (Jean Antoine Carrel) とルイ・カッレル (Louis Carrel) とをガイドとして伴つて行つたと言ふ事は、名高い、そして美しい、登山史上の挿話である。地質學者として、植物學者として、科學者として、畫家として、殊に登山者として、此の大アンデスのマッシューフを横斷した。即ちウィンバーは一八七九年十一月三日サウザンプトンを出帆して、同月二十四日コロンに到り、十二月九日より十二日迄は Guaraguini に、十二月十七日より二十五日迄は、Guaranda に滞在して、十二月二十六日チンボラゾ (Chimborazo, 6,580m.) に於ける第一キャンプを作り、二十七日第二キャンプを、一八八〇年一月二日第三キャンプを設置して、翌一月三日最初の登頂を試みたるが失敗し、其の翌一月四日漸くチンボラゾの初登頂を爲した。一月六日七日には一八・五〇〇呎迄二回登つた。一月八日より十一日迄は第二キャンプに止まり、一月十二日より十六日はチンボラゾ山麓に止まつた。一月十七日より二十三日迄は Anlaso に滞在したが、此の間案内者ルイ・カッレルが非常に凍傷に苦んだ爲め、著しく行程を妨げられたのであつた。一月二十四日 Latacunga 着。一月二十五日 Machachi 着。此の地は數週間ウィンバーの根據地と成つた。二月二日 Corazon の登頂。二月九日 Illiniza の登山を試みた。二月十八日十九日コトバキシ (Cotopaxi, 5,960m.) に登頂し山頂に一夜を過ごした。二月二十三日シンコラダ (Sincholagua) の初登頂。三月一日 Machachi より Quis へ。三月十日アンチザナの (Antisana) 初登頂。三月二十二日 Pichincha の登頂。三月二十七日より二十九日迄キトウよりカヤンベ村。四月四日 Cayambe を、四月十七日 Sarawen の登頂。四月二十一日 Cayambe より Oloralo 四月二十四日コトカシ (Cotacachi) の初登頂。四月二十八日二十九日は、

Ibarrá を訪ね、五月二日三日はオタヅァロよりキトウに歸着した。同地にてウィンバーは暫時病の爲め滞在した。六月七日キトウよりマカシへ行き、六月九日 Illimiza の登頂の第二回の試みを爲した。六月十二日 Latacunga へ、六月十三日 Ambato 六月十四日 Riobamba に着し、六月十六日より二十一日に亘りて Alar に登る可き登路を搜索せしも不成功に終つた。六月二十九日 Carhuarazo の西頂の登山。七月一日より三日迄チンボラゾを前と異つたる登路より第二回目の登頂を爲して、チンボラゾの登山を完成した。七月四日より七日迄に Riobamba に達し、七月八日より十三日迄に Riobamba より Guaguil に達して順路を経て歸英した。ウィンバーは此の九ヶ月以上に亘る大旅行の間一四〇〇〇呎以上の高距に總計三十六夜を送つたのであつたのであつて、コトバキシに於ては其の噴火口上に於て貴重な物理學的實驗を爲し、其の時迄斯る高距に生活せる最も長期の記録を作つた。

歸英後ウィンバーは彼れの此の大旅行の紀行を雜誌形式にして 'Explorations among the Great Andes of Ecuador' と題して發表し、一八八一年二月一日ローヤル・インスティテューションに於て開かれたるアルバイン・クラブの會合に於て又此の大旅行に就て講演を爲した。同會合には其當時のプリンス・オブ・ウェールズにて後のエドワード七世陛下も臨席ありて非常な賞讃の辭を享けた。後ウィンバーは數多くの挿畫地圖を附し、ボォー教授其他の人々の科學的記文を附録として、'Travels among the Great Andes of the Equator' なる一著を爲した。同著の有名な批評をウィリアム・マッシュウスがアルバイン・ジャーナル誌第十六卷一七七—九五頁に掲げて居る。

一八九一年ウィンバーは 'How to use the Aneroid Barometer' なる小冊子を世に送つた。(A. J. vol. XL. p. 177 参照) 此れは主として彼れがアンデスに於ての經驗より得たる結果を發表したのであつたが、其後一八九八年九月に於て此の問題に對してより精密な實驗を主としてツェルマットの附近の峯々に於て行つて、其の結果を彼れは一八九八年十二月十七日發行のタイムス紙に發表し、後訂正を加へて更にヨークシャー・ランブラース・クラブ・ジャーナル(四二頁)に再録した。而して更らに又同問題を取扱へる 'A New Mountain Aneroid Barometer' なる研究を Manchester Geographical Society

のジャーナル（一八九九年）に掲載したのであつた。

一八九二年ツェルマットを暫時訪ね、嘗つて一八六五年七月十三日十四日の夜に用ひたテント張場を再度訪れた。而して其の翌年彼れは有名な彼れの考案せるウインバーテントの効果を試みる可くアルプスに天幕旅行を爲した。即ち同年七月八日 Melichen 氷河に第一の露營を爲し、七月九日悪天候の中 Rimpfisch Horn を殆んど頂上迄登り、同月十一日にはラングェンフルュヨッホを越え、同月十三日にはシニトックホルンバスよりゴルナー氷河に下り、下テオドル氷河の近くに露營した。其後十日間に亘る悪天候の間はシュワルツゼーホテルに避難し、七月二十四日はツムット谿谷に露營し、同月二十五日コル・ドゥ・ヴァルベルリイーネ、同月二十七日コル・デュ・モン・ブリュレ、同月二十八日コル・ドゥ・コロンを越えて露營を續けて伊太利アオスタのクールマユールに出で、八月四日ドームの登山小屋よりルフェウヂュ・ヴァロットに越え、同月五日悪天候中をシヤモニイに下つた。八月七日更らにシヤモニイを出發して、同月八日九日をモン・プロンの絶巔に露營して、長き天幕旅行の最後とした。ウインバーは此の旅行の紀行文を數多くの枝話を加へてグラフィック誌に一八九四年九月十月兩號に亘りて掲載した。

一八九四年ウインバーは七月二十六日よりモン・プロンに登り、彼れの案内者 Mathias Nurbigen と五日間を頂上に送つた。

一八九五年九月十一日には其の數日前惹起せる有名なアルテルスのシュワルツ永河の雪崩の現場を訪ね、一八九八年四月の *Leisure Hour* 誌に 'The Great Avalanche on the Gemmi in 1895' なる一文を載せ、又彼れが想ひ出の山なるマッターホルンを登りて、伊太利ブルーニユに下つた。彼の伊太利の登山者ギドオ・レイが、ウインバーに會遇せしは其の時であつた。(Rivista Mensile, of C. A. I., 1895, p. 281 参照)

一八九六年ウインバーは 'Guide to Chamonix and the Range of Mont Blanc' を上梓した。(一九一一年十六版、一九一二年佛蘭西版) そして一八九七年には同じく案内書 'The Valley of Zermatt and the Matterhorn' を出版した。(一九一一年十五

版、一九二二年佛蘭西版) ウィンバーは此の二書に關して毎年改版するの止むを得ざる程年々ツェルマットとシャモニイを訪ふたのであつた。

一九〇一年ウィンバーは又もアルプスを離れて始めてカナディアン・ロッキースを訪ふ事と爲つた。此の旅行は同年六月九日 Banff に到着し、Mount Mitchell の初登頂を爲した。(Howard Palmer, Climber's Guide of Rocky Mountains, p. 30 参照) 而して其れより Vermilion Pass を訪ねて Mount Franklin (今日ではマウント・ウィンキーと呼ばる。ibid. p. 63) 七月九日より十一日迄 Pope's Pass に露營して、Mount White の初登頂を爲した。(ibid. p. 57) 七月三十一日エメラルド湖より一部分新路に依りて Yoho valley に達し、八月二日 upper Yoho valley を發見し、Field 迄エメラルド・パス(ウィンバーの謂ふ Shaughnessy pass) の初通過を爲し (James Outram, In the Heart of Canadian Rockies, pp. 201-5 参照) 八月六日彼れのオリジナル・ルートに依りて歸着し、八月八日 Mount Kerr の初登頂 (Rocky Mts. C.G., p. 77 参照) と Kivethnok pass (ウィンバーの謂ふ Kerr's pass) の初通過 (Outram, p. 200 参照) を爲した。そして更に Mount Marpole の初登頂 (Rocky Mts. C.G., p. 77 参照) Isolated Peak の初登頂 (八月十四日 ibid., p. 67 参照) Mount Hobel (今日謂ふ Mount des Poilus, ibid., p. 79 参照) の初登頂を爲してより、八月十六日十七日にオホホオ氷河の麓にキャンピングを移して、八月十九日には Mount Collic 八月二十一日には Mount Trollinder の初登頂を爲した。(A. J. vol. XX, pp. 542-4; Appalachia, X, pp. 85-6; Outram, pp. 197-200, 202-3 参照) 其後ウィンバーは Ice River Valley を訪ひ、九月二十四日 Mount Wapta の第二登頂を爲した。(Outram, p. 181 参照) 而して其れより約三ヶ月をフィールドに滞在して歸英した。此の旅行に關してウィンバーは一九〇三年六月の Scribner's Magazine に 'A New Playground in the New World' なる記事を誌めて掲載した。又岩石の標本を數多く蒐集して來た。(A. J. vol. XX, pp. 60-1 参照)

一九〇四年に於てウィンバーは再びカナディアン・ロッキースを訪ね、今度は六月二十八日に Crownest Mountain の初登頂を爲した。(Canadian A. J., III, p. 117; of. ibid., I, p. 103 参照) 尙ほ其れ以上の記録は無い様である。晩年のウィンバーの

注意を惹きしは將に此カナディアン・ロッキイスであつた。ロッキイは當時登山者に依りて漸く實際に開發せられつゝありし時にて、ウィンバーも洵に之のバイオニヤの一人であつたのである。一九〇九年ウィンバーは彼れの死に先立つ三年前再三カナディアン・ロッキイスを訪ひ、今度はカナディアン・アルパイン・クラブの Lake O'Hara のキャンプに滞在して登山は爲さなかつた。(A. J. vol. XXV. p. 30 参照) 此の年を以つてウィンバーの登山經歷は完全に終りを告げたのである。以上の如くに其の殆んき全生涯に亘つてウィンバーは數々アルプスやグリーンランドやアンデス、ロッキイに山旅や探險旅行を試みたが、其の間は彼れの父の故郷ならイングランドはテディングトン (Tadinton) の平和な小さな、町に其の身を落ち着けて居たのであつた。

ウィンバーの著書は可成りに多くあつて、其れは彼れが一畫家より登山者として、地質學者として、植物學者として、物理學者として、種々の學究的な研究を爲す様に爲り、始めは全く何等の素養の無い一畫家が立派な科學者の域に達する迄、尙ほ其の上全部を通じて、登山史上不朽の名を留めたる大登山者としての赫々たる生涯の徑路を吾人に逐次的に展けて呉れるものに他ならないのである。事實ウィンバーは文筆に於て勝れた才能は有して居なかつたのであるが、然し、彼れの彼のマッターホルンの初登頂、其の悲劇と後想の邊りの章句は、實に山岳文學の上から觀て不朽のものであると爲されて居る。然し乍ら此れの如きは寧ろ彼れの才能に依るものでは無くて、歴史が描く美しい背景に依るものであらうと一部の人々に言はれて居る。彼れの著書を年代順に擧げるならば

Scrambles amongst the Alps from 1860 to 1871 (1871)

Travels amongst the Great Andes of the Equator. (1891)

Agnide to Chamonix and the Range of Mont Blanc. (1896)

Agnide to Zernatt and the Matterhorn (1897)

の四書があるが、尙此の他多くの興味深い小冊子がある。彼れの文体は前にも書いた如くに、他のステイブントとかティン

ダルに比しては立派な、優れたものではないが、烈しく、そして其れが豊かに潤飾されてある。そして其の中には熱情が溢れては居るも、矢張り英國人的のユーモアが一脈流れて居る事を看過する事は出来ないと言されて居る。

一八七一年伊太利國王フンベルト一世はウィンバーの其のエネルジイと、其の著名な登山の上の勳功を賞でて、彼れに *Chevalier des ordres de Saint-Maurice et de Saint-Lazare* の勳位を授け、又王立地學協會 (*Royal Geographical Society of London.*) は彼れに金牌を贈つて居る。彼れはアルバイン・クラブのメンバーとしては一八六一年十二月に入會を許され、一八六五年二月より一八六七年迄は委員を、一八七二年より一八七四年迄は副會頭の役員を勤めた。而して彼れは佛蘭西山岳會 (一八九八年) 加奈陀山岳會 *Appalachian Mountain Club*, *Yorkshire Ramblers' Club*, 瑞西山岳會、伊太利山岳會等の多くの各國山岳會の名譽會員であつた。

不屈、大膽、熱心に依つて色付け、特徴付けられた波瀾万丈の彼れの青春時代から壯年時代に掛けての半生涯を終へたウィンバーは、漸く彼れが六十六歳の晩年に成つた一九〇六年に於て、始めて *Edith Mary Lewin* 嬢と結婚した。此の事は彼れに取つて恐らくマッターホルンの初登頂より以上に重大な、彼れの後生涯での出来事で在つたらう。今やアルプスの古き鬪者は、英國の平和な田園に圍まれたコッテージの中に於て、其の若き妻の愛に抱かれ、愛らしい我兒の生ひ立ち行くのを見守る悦びの中に、結婚生活の魅力と言ふものを始めて味つたのであつた。此の常人的な生活を彼れが又立派に完成したと云ふ事は、彼れに取つては同じく一つの大きな功蹟では無かつたらうか?

然し乍らウィンバーは彼れが此の晩年の楽しい、平穩な家庭生活と言ふものを、永く楽しむ事は出来なかつた。彼れは一九一一年九月十六日彼れの愛せるアルプスの谿谷シヤモニーに於て逝いた。マッターホルンの歴史を研究する事に於て又名を知られて居る瑞西現代の山岳文學者たる彼のシヤルル・ゴオは、彼れの著『萬年雪と氷河のほとり』 (*Plus des Neiges et des Glaciers. 1912*) の中なる一章、「登山者の面影」 (*Profilis de grim Peurs*) の中に於て、ウィンバーが死を聞いて追想的に叙して言ふのに、

「ウィンバーは逝いた。此れでセルヴァンの彼の壯大な岩壁の陰暗な書割かきわりの中に四十六年間演じ続けられた悲劇は殆んど終りを告げたのである……。」

或る夏の事であつた。偶然に私はウィンバーと一緒に或る中流どこのアルプスのホテルの同じ屋根の下で、幾日かを送ると云ふ事に爲つた。私は屢々ウィンバーに遇つた。私の若さが彼れの老年さと好く氣が合つた。そして私達は好い話友達と成つた。

或る夕暮私とウィンバーと唯だ二人は落葉松の林の中に廊下の様に續いた散歩道を歩いた。黄昏は谿底を青くして居た。山上に落ちかゝる夕べの平靜の中では、家路に歸へる家畜の頸鈴の音が響いて居た。空は澄んで居た。

黄昏の魅力の籠つて居る其の邊りの沈黙を破つて、老いたウィンバーは感慨深く次ぎの様な獨り言を呟き言つた——
「もう殆んど其の時から四十年経つて居ますよ。」私は直ちに其の言葉を會得した。此れが私達が話題に緒口を付ける最初の言葉であつた。……そして、彼れは思ひ出す様に、四十年以前の回想に耽けりつゝ、マッターホルン初登頂の時の彼のカタストロフに就て私に話して呉れた。そして話がハドウ氏の滑つた個所に來た時、私はウィンバーに尋ねた。

「其んな所ちよつとした身体を滑らした事で、そんなら、彼の恐ろしい出來事が起つたのですか？」

ウィンバーは私に答へた。

「全くです、ちよつとした踏み滑らしからです。此んな下らない、些細な事で死んだミッシェル・クロッツが可哀そうですね。」

そうして彼れは口を噤んだ。其處には非常に重々しい沈黙が在つた。沈黙は雄辯だ。其の動かない、無表情な全るで假面の様な顔色の冷たい無感覺さを突き通して、此の人の顔を凝視めた。一條の皺——唯だ一つの——が其の額を陰深く刻んで居た。慘酷なりし過去の記念！ ウィンバーの眼は傍近くの迫り聳える峯の白き頂にちつと引かるゝ如く向け



春日峠太権

られて居た。私の眼は彼れの驚の様な眼に従つた。氷で刻まれたアレートには金の色や薇薔色やもつと織かな種々の色合ひの線が象徴されて居た。ずつと遠くで落日が、明るさを手間どらせて居た。此の山の背後には、尙もセルヴァンは聳えて居るのである。見えないけれど、然し其れは彼れを苦しめる。高い岩に沿ふて登つて行く陰影が、其の神秘を包んで行く。そして私はウィンバーの孤獨なシルウエットを其時象徴して見た。

今や、クロツツ、ジャン・アントアヌ・カッレル、マッキニヤ、僧正アメ・ゴツレ、エドワード・ウィンバー……マッターホルンの初登頂と永久に離れ難い人々は皆逝いた。斯くしてセルヴァンを蔽ふた、驚く可きドラマチックな歴史の最後の一葉は總てを移らせる「時」の大きな手で靜かに捲られ終えたのである。』(Ibid., pp. 289 a 354)

一九二五年八月九日に於いて、マッターホルン初登頂六十年記念祭が其の山麓ツェルマットに於て舉行された。そして其れに際して、ウィンバーの爲めに青銅薄肉彫りの肖像が、縁故深きホテル・モンテ・ローザの入口の石壁に置かれる事に爲つた。(Alpine Journal Vol. XXXIII, NO. CCXXI 1925, p. 338)

—— 此稿完 ——

【附記】——此の小傳に於て筆者は單にエドワード・ウィンバーの登山者としての小傳を誌さんとする者にて、然も其は廣汎なる登山史の一部とも稱すべきものの爲めに企圖したのである。其故可能的ウィンバーの生涯全般に亘る登山者としての經歷を誌すに務めて如何なる傳記記者もが、其れに濃彩を加えつゝ筆を長く費す可き彼れが生涯での一大事件たる彼のマッターホルン初登攀前後の事情に就ては出來得る限り此れを簡明に記するに努力せし、又筆者自身此の點に筆を運ぶに到つては、此の登山史上最大の興味あり且つ又事實重要な劇的場面を略筆して、一時に飛躍し、以つて彼れが一八六五年以後の經歷に迫る可く餘りに省筆を許さざるもの存りて、又多少其の點に運筆の重點を奪はれたるの觀あるを自覺した次第である。

筆者がマッターホルン初登攀前後の事情に就て故意に此れを回避せんと企てしては、此れに對する文献餘り饒多にして、且つ人口に膾炙し居れば、又改めて其れを記するの要なく、寧ろ其れよりもウィンバー自身の未だ普く知られざる方面を筆にせんとせし意に出でしに他ならないのである。

ウィンバーの著作中最も名を知られて、且つ Great classic work の一なる Scrambles amongst the Alps in the Years 1860-69

(通常其の書名を略記して單に Scrambles amongst the Alps とのみ記されて居るが、正しくは上記の如きものである。は一八七一年其の初版が世に出た。(アルバイン・ジャーナル第五卷二三四頁に於てレスライ・ステイアブンに依りて批評せらる) 筆者は其の初版(横有恒氏所藏)を親しく手にして引用するの機會は此れを得なかつたが、其の装帧挿畫總べて甚だクラシックにして立派なる美本である。第二版は同じく一八七一年に第三版は原作者の數章に改訂を加へ、挿畫(ウインバー自身の手になる木版畫)を増補して The Ascent of the Matterhorn (London Soc.) なる新書名の下に一八八〇年に、更に完全に改訂増補した第四版と限定版は一八九三年に、第五版は一九〇〇年に夫れ夫れ出版された。而して同書の獨逸語譯は忠實に原著を H. Steger に依りて譯され一八七二年 Brunns wick (Svo.) より出て、(同譯第二版は一八九二年、第三版は一九〇九年に出た。) 佛蘭西語譯は、一八七三年 Adolphe Joanne の手に依りて譯され edition de Juxte として出づ (Librairie Hachette et Cie. 同譯第二版は一八七五年に出た) 更に増訂新版は其後年經たる一九二二年に於て Genève, Librairie A. Jullian より出版せられて居る。而して廉價版たるシムリング・エディションは一九〇八年に出た。

マッターホルン初登頂の記述としてウインバー自身に成るもの以外に於ては實に其の數や頗る多くして、筆一度マッターホルンに及べば、人皆此れを叙するの觀がある。乍然其の主なるものとして筆者の知るものは凡そ左記の諸書語編を數ふるを得。

The Matterhorn by Guido Rey. with an introduction by Edmondo de Amicis. translated from the Italian by J. E. C. Eaton. (First Edition, Oct. 1907. Second Edition, Dec. 1907) London, T. Fisher Unwin.

同著佛蘭西譯は E. Gaillard Le Mont Cervin. Avec une Préface de E. de Amicis. Paris, chez Hachette, 1905. Troisième édition 1911.

Theodor Wundt: Das Matterhorn und seine Geschichte. Berlin, 1896 (美麗なる挿畫あり。)
Charles Gos. Propos d'un alpiniste. 1920. Paris et Lausanne. Librairie Payot.

而して、就中キドオ・レイの『イル・チェルツィノ』は其の結構の精巧と行文の華麗流暢と叙事の精細詳密と加ふるに有効なる引例の豊富とより普く承認せられ嘆美せられて、同書出版の當時より頗る好評を博せる名著にして、常にウインバーの Scrambles とは併讀せらる可きものある。殊に同書に於てマッターホルン初登頂の條或ひは晩年のウインバーに原著中の同山下に於て出會せし時の感慨を叙せる章句等は甚だ名文にして恐らく不朽的のものであらう。而して同著の同章句は既に邦語にも移植せられて、岡田哲藏氏の『山岳と文學』(登高行第三年二〇—二二頁)の中に、又其後更に横有恒氏著『山行』第三章登高記の第四、マッターホルン(七三—七七頁)中に譯出掲載せられて居る。

テオドル・ヴェント著も又マッターホルンに關しては同じく好評あるものにして、其の一著に全然マッターホルンの叙述に當てられたものである。筆者は然し乍ら未だ此の著に充分親しんで居ぬ。(横有恒氏所藏)

シャルル・ゴオの著書の中にはマッターホルンを叙せるもの多けれど、純正な歴史的叙述のものとして筆者は此の一著を擧げ得るのみであるが、併し其の行文美はしく、叙事又被れ一流のものて好文字たるを失はぬと信する。ゴオはマッターホルンの研究者なれば此の他尙は多くの文献を有して居るであらう。

ランのものは叙事明快にして行文又流暢である。此他に多く在るであらうが、實際筆者は是迄讀んで居ぬ。以上の諸書よりも邦文に於てより詳細に此の初登攀前後の悉皆を叙したものは既に衆知の事と思はれるが、『山岳』所載の岩村圓氏の『マッターホルン初登攀』である。

Travels amongst the Great Andes of the Equator (1891) の獨譯 Berg-und Gletscherfahren in den Anden in den Jahren 1860 bis 1869. 第四版は近く一九二二年 Braunschweig, Westermann より出版された。

寫 眞 說 明

「春山峠」は豊原と眞岡を通ずる山道中の難所として知られて居る。大泊極光スキークラブの田村節郎君外二名二月十日大泊を發し、豊原眞岡往復の二百四十軒スキー旅行に成功し十三日夕刻無事大泊に歸着した。寫眞はその時の撮影にかゝるものである。低く黒く連る針葉樹の山々、立枯れのエゾ或はトドの古木は、極北の地、樺太の冬を遺憾なく表現して居る。

「コルチナの大會にて」は共に木原均氏より贈られた寫眞で上圖は十八軒及五〇軒レースに優勝せるスウェーデンの選手リンドグレン (Lindgren) の勇姿である。

又下圖はコルチナのジャムプ大會の觀衆の寫眞にてこの人々の間に木原均氏の姿を見出すことも出来る。(上)
コルチナの大會の詳報は本原氏よりの通信にて知られたし。

天鹽岳と北見峠附近

原 忠 平

北方宗谷峠に起り、南嶺東に連亘し、南端は愛別から、湧別に通ずる北見峠に終る。北見山脈の南部に天鹽川、留邊藥川支流、岩内川、渚滑川の清流を集めて、天鹽岳が聳えて居ります。この山の名は私達の記憶に明らかであると思はれますが、登山として私達のグルツベからも又他の登山家達からも餘り顧みられなかつた様であります。それは標高が餘り高くない點もありませうし、近くにあの雄大な大雪群峰をひかへてゐた爲でもありません。この不遇な山しかも未だ見ぬこの山の姿を私達は心に書き、密かに登高の希望を燃してゐたのであります。

その登山計畫が成つたのはニセイカウシュツベ山の計畫が中止され、急に定つたものでありまして、登路として、考へられましたのは北見瀧ノ上より渚滑川を溯りオサツナ

イ川より頂上を極めるものと、上川より留邊藥川を溯り岩内川より頂上を極めるものゝ二つでありました。しかるに札幌を基點として考へますと、その交通上からも、人夫の都合からも、私達は後者を以て便としたのであります。私達は第一日に上川から天幕、第二日に岩内川上流に露營致しまして、次の日より頂上に向ふ事に致しました。

こゝに考へますのは冬期露營の事でありました。この天鹽岳のコースを考へますに一日行程として最後の部落から、登る事は不可能では無いと思はれるのであります。私はスイスの連峰を登攀するのに夜、星をあびてラテルネの光りを便りに約十二時間も頑張るといふ話を聞きました。冬期露營に要する防寒具や天幕や食料や人夫や……それを準備して、相憎く天候がその準備中良かつたといふ場合も考へ

ないわけには行かないと思はれます。兎に角、この問題は別として、今度の私達の場合は、それが標高に於ては低い山ではありますが、未知の地であります爲、又時間も充分ある休暇中の事でありました爲、ゆつくりと登りたいといふ氣持もありましたでせうし、又露營に馴れる必要もありました爲、兎に角岩内川上流に露營致す事にしたのであります。防寒具としては馴鹿トナカイのシユラーフサツクと人夫には防水布のシユラーフサツクに毛布、其他石油焔爐を用意致しました。

この登山が案外好天氣に恵まれて早く成功をする事が出来ましたので私達は北見峠に参りました。その記憶は天鹽岳の頂上に初めて立つた深い喜びの印象と同じく、私の心に深く刻み込まれた楽しい思ひ出の一つなのであります。

以下こゝに大体の記憶をたどる事に致します。

一行 伊藤秀五郎、野中保二郎、山縣浩、原忠平

冷えきつた冬の夜風に横頬を打たせながら、札幌郊外の桑園驛から旭川方面行の汽車に乗り込むのは正月三日の

夜も十二時に間近い頃だった。淋しい正月ではあつたが、その雑多な都會から離れて、雪に深くうづめられた深い山に分け入らうとする私達の心には強い緊張味と靜かな幸福が感じられた。

曇寒別岳に向ふ山口君一行と深川で別れて上川に着いたのは八時、菊谷さんは未だ來てゐない。驛前の層雲別温泉の出張所である樋口旅館に一先づ落付いて人夫を待つ事にした。米、石油、其他買物をすませたが未だ來る様子もない、或は電報が着かないのかもしれないので宿屋の主人に層雲別村まで迎へに行つてもらふ事にして、私達は天幕テントの小學校まで行つて宿を乞う事にした。

荷になるシユラーフサツク、天幕、米の類をのこして、正午旅館を出發した。カチノゝに凍つた馬橋路を眞直に進むヌタツクの方面もニセイカウシユツベの方向もその頂は深く雪につままれて、唯その大きな、どつしりとした山裾が如何にも雄大に眺められる。留邊藥川に沿ふて、淋しく取残された様な農家を幾つか通つて行くと間もなく天幕に着いた。(一・四五分)そここゝの小學校を訪れて一夜の宿を乞つた。

通された教室にはその片隅に大きなストーブが置かれ、
廣くもあるし、新しくもあつて、又奇麗に整理されてあり
相當感じの良いものだつた。

「こうした山間の所では薪が何よりの御馳走で……」
と言つて太い大きなのをどん／＼くべてくれた。

私は想つた。こうした開墾村！ 荒れ淋れたる未開の大自
然に向つて、只管汗を持つて墾き耕す開墾者の小さな小供
達を自分の思ひ通りに、力と熱とを以て教導する事の出來
るこの訓導は如何に幸福なるかを！ 如何にその生活が深
く力に満ち／＼てゐるかを！ やがて訓導はもどつて來た
全く人の良い老人であつた。しかしかゝる自然に恵まれた
人々の胸にも或る人間性の醜き半面が影ざしてゐるのを想
はざるを得なかつた。私は私の想像も全く裏切られて、淋
しい／＼氣持になつて思ひに耽つた。

夕方になつて樋口旅館の主人が馬籠でもつて荷物を持つ
て來てくれた。菊谷さんは間もなく來るさうである。

夜食は思はざる歡待を受けた。夜も大分更けて菊谷さん
と人夫一人がやつて來た。

五 日

天氣も冬としては良い方で八時小學校を出發した。山と
山とにかこまれた平地を良雪を喜びながら進む。一二六〇
米の尾根から一二三米に續く尾根は朝の陽光に照り輝い
てゐる。三十分ばかりで最後の人家に着いた。人夫達を待
ちながら、澤に面した小さいスロープで遊ぶ。体の調子が
悪くつて皆んなよくころむだ。

「昨夜の薬がきゝすぎて……」と言ひながら汗をふき／＼
菊谷さん達がやつて來たのはそれから三十分も後だつた。

澤は相當雪でうづまつてゐた。私達は川沿ひに平地を進
む。澤は樂なもので、ハコガ谷がせまつた所は少かつた。
第一の二俣を渡つて、十一時三十分人夫を待ちながら中食
を取る。右手のスロープで遊ぶ。雪は物凄く良い、晴れる
であらうと豫想された天候もすつかり雲につままれて、雪
がチラ／＼降り初めた。靜寂な大地の上に四人は思ひ／＼
に滑る。

人夫は雪がぬかるので路は少しもはかどらない。第二の
二俣を渡つて、第三にかゝらうとする頃は二時であつた。
時間はもうキリ／＼なので右手の平に幸ひ適地を見付け、
そこに露營する事にする。I. N. Y. は澤をしらべつつラッセ

ルを付けに向つた。私は残つて人夫を待ちつゝ、露營の用意をする事にする。

三人の友の姿は谷に消えて行つた。静寂！溪流の響が物靜かな力強い響をつたへる。私は鋸で木を切り初めた。その反響が谷から谷につたはつて行く、靜寂な純一な穩和な一時であつた。大きな音を立て、大木が幾つか倒れた。

一時間半ばかりして、I達は歸つて來た。やがて人夫達も來る。雪が墮り下けられ、薪が切られる。薄暗くなつて、やつと天幕が張れた。間もなく焚火も出來る。赤い火の子が眞暗な空に盛んに飛び上る。

空腹に暖い飯と湯氣の一ぱい昇る味噌汁は無上の御馳走だつた。

夜、天幕外に之を見るに小さな星がたつた一つ、西北の方に打ふるへてゐた。

六 日

しみ込むで來る寒さに幾度か夢を破られた。むく／＼シエラーフサツクから起出でるともう飯も出來てゐた。東北に雲が盛んに飛んで行く、西方にわずかに青空をみとめ得て私達は幸にも天候に恵れたらしい。

七時半テントを出發して澤を登り初めた。私達は雪の橋を求めて靜寂な澤に深く／＼歩み入つた。三十分もすると最後の澤とも別れ前方に天鹽岳に續く眞白な尾根を眺めた。八時半私達は東北より下る尾根に取つき初めた。天氣も段々晴れて來て樹林を通して陽光がその影を落してゐた。登るに従ひ眺望も開けて一二九六米に續く尾根が輝き初めた。針葉樹の深い暗い樹林をぬけて白樺の幹で輝しい樹林に出た。尾根に出たのは九時半である。西方より吹きよせる風は雲をつかみ、雪を飛ばして、未だ經驗した事のない程度なものではあつたが、尾根は平で危険もないので、すっかり用意して頂上に向つた。時々雲間より頂上から西方に續く一四三〇米のピークに輝いた。眞白な姿が屹立した。

頂上より一つ手前のこぶの下の小さな樹木に風をよけてスキーデボットを定めた。クラストの雪も、松の上を踏む時は股まで落込むのである。風はいよく／＼強く、やゝもすれば私達は吹き倒されるのであつた。緊張の極度の内に最後の頂上へのステップを切つた。十時四十五分遂に私達は絶頂にたどりつく事が出來た。この烈風の怒號と雪片の亂

舞する間に限られたるこの小さな世界にお互は言ひしれない歡喜を味つた。ふと西方にあたつて、雲間より強い陽光を全姿にあびた輝かしい雪の峯が屹立した。燃え狂ふ様に！そして又すぐ濛々たる霧間に四圍を斷たれた。

無言の内に私達は降り初めた。下りは正面に風を受けて登り以上苦しいものだった。幾度か風の爲に打倒された。スキーテポットに立歸つたのは十一時五分、すぐスキーをはいて滑降を續けた。森林帯に入ると張りつめてゐた緊張もゆるんで、それと共に暖い陽光が照り初めた。中食を取る。天候はすっかり恢復して大雪の群峯まで見え初めた。十勝岳から續くオブラタテシケ火山縦列も指示される。北嶺のリツチあたり強い風の爲か天空に向つて盛んに雪を飛ばしてゐる。十一時三十分である。私達は天鹽岳の容姿を求めて、再び國境の尾根まで登つた。風も大分おさまつてゐる。嚴冬の陽光を全姿に受けて無限の青空にどつしりこ輝いてゐる天鹽岳！思はず歡聲の叫を上げた。三十分前。あの暴れ狂つた大氣の内にあの風雪と私達が闘つたとは思はれない静けさである。光明と純白と單一の静かなる融合である。東南の岳樺の生えてゐる美しいスロープに吸ひ込

まれる様に私達は滑つた。四人は静寂な、そうしてこの美しいスロープを夢の國に歩み入つた様な想ひで滑つたであらう。山は輝く、雲は狂ふ、スキーは飛ぶ。

一時、再び私達は澤へと下り初めた。頂への厳しい争闘や静かに滑つた想ひと、楽しい「山歸り」と言つた様な氣持にひたりながら、明るい樹林から針葉樹の澤へと下つた眞白に輝いた雪峯や美しい白樺の森が深く心に刻み込まれて樂しかつたその一日を想ふと、自然幸福な微笑が浮ぶのあつた。澤を下つて行くとかすかに煙の立登るのが眺められた。意外に早く歸つて來た私達の姿を眺めて二人の人はその成功を知つて心から喜んでくれた。(二時)

「今日で露營も引上げる」

こう言つた氣持が皆んなの心に高まつて夕食には罐詰が開かれる質素な晚餐が心から喜ばれた。山の様に切つた薪もどし／＼くべる。皆んな焚火を包むで話し初める。話ははづむ、笑聲が起る。焚火の薪もくづれ落ちて夜も更けてくと勢れが出て來て眠くなつて來た。美しい星夜である。歌聲がかすかに谷間に消えて行く。

七日

三日間の楽しかつた住居も今日は別れるのだ。ベットに敷かれたタンネンの葉が別離をおしみつゝ焚火にくべられた。濛々と立昇るその煙が谷をおほふ。九時半出發する猛烈に良い天氣だ。春の様に汗が流れる。四人は思ひ思ひに追憶をたどりつゝ澤を下つて行く。やがて最後の部落に着いた。あの平地を私達は後を振かへり進んだ。小學校に一時半につく。

先生夫妻も喜んで迎へてくれて。湯をわかしてくる。夜は又色々と御馳走にあづかつた。酒の好きな先生らしく。菊谷さん相手に盛んにやつてゐる。話は色々はづんで來た。昔天幕三次と言ふ獵師がこの岩内川から天鹽岳に向つて登つた事があるさうである。彼は谷から谷へ獲物を求めてさまよひ歩いたであらふ。それから幾日経つても再び彼の姿を見る事は出来なかつた。或は深い森の凍つた澤に永遠の眠についたのであらうか。その彼の名前が残つて今ではこゝを天幕と呼んでゐるのであるさうだ。

晝の勞れが出て間もなく私達は床に入つた。

八日

菊谷さんとも別れて私達四人は石狩北見の國境の北見峠

に向つた。猛烈に悪い雪だつた。ベツトリと塗臘したスキも尙雪が着くのを防ぐ事も出来ない位だつた。茅刈別を過ぎるともう全く淋しい峠路で、わずかに獵師の、わかんざきの跡が雪面に印されてゐるだけだつた。私達は早くも旅人の寂寥な心になりきつてゐた。雪曇りと言つた空合ひは、とう／＼打破れて、ちら／＼雪が降り初めた。この立派やかな廣い峠路、しかも淋しいこの峠路は、此地に流刑された囚人の手によつて作り上られたとあつて、尙更淋しく感じられた。ニセイオマップの合流點で二人連の獵師に出會つた。彼達は銃をかたに擔つて來たのである。その立派な体格と眞黒に日やけた顔、足には例の赤い毛布を巻いてゐた。私は彼等に別れてからもその赤い毛布を足に巻いて、大きな雪靴を足にしたこの獵師に自然と想ひが行つた。彼達は谷から谷へ獲物を求めてさまよひ歩きを續けてゐるのである。幾多の旅行者、旅から旅へと淋しく歩む商人や、神に對する敬虔な魂を持つて、長い旅を續けてゐる巡禮者、かゝる淋しき旅行者に等しく、都會にこそ生活し難多な毎日をめまぐるしく過してゐるものの、心は頂から頂への登攀を想ひ、谷から谷のさまよひ歩き唯それを愛

する者は心の旅行者ではあるまいか。

登るにつれて風も加り温度も急に下つて、どうやら吹雪出して来た様だ。もう峠の驛遞も間近であらうと空腹をこらへて私達は登行を續けた。谷に面して尾根裾を廻ると美しいタンネンにかこまれた淋しい驛遞を眺めた。

機關車を思はせる様な形の大きなストープを圍むでぬれたものを乾しながら私達は話し會つた。四國生れだと言ふ穩かなこゝの老夫婦は、無表情な内にも、久し振りで人に會つた喜をかくす事は出来なかつた。冬の間は一度か二度しか訪れる人もないといふこの驛遞の老人達は全く珍客を迎へて心から喜んだのである。Iは一二年前の秋、この峠を友達と二人して越した事があつて特に想ひも深いらしかつた。

親切に沸してくれた湯に入つて、山鳥や山兎の御馳走になつてから又ストープを圍んだ。無口な老人の口からこぼれる話は誠に興味あるものであつた。

この北見峠から北微東にあつて、チトカニウシ山がある。標高は一四四五米ばかりの低い山ではあるが、その山の頂から北見峠に續くスロープは地圖の上から想像しても

實に立派に想はれた。驛遞からは三時間もあれば登る事が出来るであらう。明日はこのチトカニウシ山に登る事にして私達は床に入つた。戸外は相當吹雪いてゐるらしい。

九日

暖い床にぐつすり寢込むでしまつて、眠が覺めたのは八時頃だつた。吹雪もすっかり静まつて小枝に降積つた雪が音を立て、落ちる。靜かなる朝である。九時半驛遞の老夫婦に見送られて出發した。一尺ばかり降り積つた雪は猛烈に良い。峠に出ると北見側の谷を距て、その頂は見えないがチトカニウシの山裾がドツシリと立派に眺められた。タンネンに包まれた美しいスロープが續いてゐる。コブ一つ越して東北に向ふと、なだらかな傾斜の森だ。それは美しいお伽噺にある様な夢の國とも思はれる。靜かな靜かな山奥のこうした神秘に私は美しいお姫様である雪の精を想つた。そのゆるやかなタンネンの傾斜地を登ると立派な白樺のスロープが續いてゐた。實に雄大なスロープである。十一時半頃やつと尾根を登りつめてコブに出た。西方より吹來る風は相當強いものであつた。チトカニウシ山の頂上が霧の爲、薄ほんやりと眺められる。

頂上の打くづれた三角標のかたわらで晴れてゐたならば
おそらくニセイカムシュツペ山から大雪山、石狩岳、熊根
尻岳、武利岳の北海道中央高地より尙深く入つたこの山々
の姿を眺める事が出来るであらうが、不幸にして私達は西
方より吹よせる強い風の持來るガスの爲に全く限られたる
この頂の氷つた空氣を呼吸したにすぎなかつた。

(十二時五分)

それから五分も過ぎた頃は私達は風をよけた南斜面で心
ゆくばかり楽しい滑走を續けてゐた。荷物を置いて天氣の
晴れるのを待ちつつ滑つた。雪は物凄く良い、澤に下る
この傾斜は白樺の美しい疎林で、樹氷が木々を飾つてゐた
静寂な樹林の滑降者！ 私達は何事もわすれて、唯清澄
な純白な静寂な、この大氣と樹林と白雪との間に燃上る様
な溶け入る様なスキ一の享樂を打續けた。明るい白樺の樹
林から深い針葉樹の林へ、それからそれへと唯滑つた。
陽も西に傾いて、樹林の空氣も氷つた頃、北見峠に私達
は下り着いた。北見に面した雄大なスロープに幾條かの直
滑降を最後に飛した。

「山が晴れた……、おーい山が晴れたぞ！」Gが叫ぶ。

見ると、チトカニウシの山頂は雲よりすつかりぬけ出で
、その日の最後の太陽の光線に日没時の魔術的な色彩を
現してゐた。靜かにバラ色がうつた雪面！ それも淡い灰
青色にさめ變りつゝ消えた。その夕映の最後の痙攣と共に
その翌日、私達は樂しかつた思ひ出の數々を胸に深くお
さめて、淋しい峠路を下つてゐた。再びあの街へ！ 我達
が住むでゐる雑多の騒音のあの町へ！！

國際スキー
聯盟主催

一九二七年國際スキー競技大會

於コルチナ 木

原

均

第一 信

ベネチアを一月二日の午前十時十五分に出發してコルチナに着いたのが午後六時、途中から瑞西の選手一行と一緒になつてグリーンデルワルドのルビと話し乍ら道中をした。

コルチナは寫眞の通り三千米突級の山に包まれた南北に長い盆地で、ゆるやかな大きな斜面が町をかこんで居る。

町には瑞西と異つて土産物をうつつたり、スキー、スケート類の販賣所、賃貸屋が少ない。と云ふのは比較的質素な場所だと云ふ事になる。スキーの手入（臘をぬつたり、雪をとつたり又ははいたりぬいだりする事）さへ他人の手を借りる人達の多い處ではかゝる店やが軒を並べるのは當然

である。

コルチナ (Corina d'Ampezzo) の事を記す前に簡単にシヤトノデエの瑞西選手權大會の事を新聞の記事からお知らせします。此の大會には武さんも出場して居るのです。

此の競技會にはドイツが選手を派遣して居るので、幾分對抗的のものゝ様です。複合競技に、ドイツのグラース (Walter Graess) が優勝して遂に瑞西スキー、マイスターとなつたのです。昨年のマイスターであるミュットは僅かの差で負まけました。

十八キロのコースは非常な急傾斜があつて頗る難かしいものだつた相です。それにジャンプの方でも非常に立ち難いものだつたとプレシデントであるダネガー氏も云つてます。そこで武さんは二度立つて三十七米を出し一度仆れた

由です。最長不倒距離は五十四米突です。

(結果は本誌七〇號に採録せり。編者)

コルチナの國際スキー大會に來た、獨乙のマンシヤフト (Mannschaft) は瑞西のと別です。參加した主な國は瑞典、ドイツ、チエコ、ユーゴスラビア、スイス、イタリーです。昨年も氣のついた事ですが國際スキー大會はその實力に於て國々の間に大きな差があります。例へば Bindungs (長距離の) でも種々雑多です。ある選手 (ユゴスラビア?) の如きはピリゲリーで走つた。ハウクもあるし、ベーチエー式、B B 式さてはフィットフェルト、ベルゲンダールがある。ベーチエーはB B に似たもので瑞西では一般に用ひられてるものです。日本にはもう這入つて居ると思ひますが一言、恰も締具の品評會である。締具で見ても實力の程が大体分るでせうからこんな事をかいたのです。

コースは實に廣々として大きな斜面で、コルチナの町を時計の針の方向に廻るのです。望遠鏡で向ふ側を走るランナーを見られる程度です。此の精しい地圖は別封して送ります。一周廿五キロで二周するのです。此のコースならば轉がるために時間の後れる事はないでせう。登りのコースも

出来るだけのゆるやかにつけてあるので、適當なワックスの入達は樂に登れます。その上樹木のない處ですから見通しがつきます。標高の差は三百四十米突位です。教會堂の高い塔のそびえた町を中心として晴天、北の微風、溫度氷點下五度のよいコンデイションで大會が二月三日午前八時半から開かれました。一周して選手がスタートをもう一度通る頃は随分の差が出て來ました。瑞典は一頭地をぬいて居ました。走るにもドライシユリットをよく會得してない選手がある。

ゴールに第一に這入つたのは十番の瑞典選手 (Lindgren) で次ぎが同じく瑞典選手で二十番。外の選手は餘程遅れてゴールにかへつた。ゴール前の直滑降に移る前の登り斜面は随分と長い二キロは充分あるだらう。此登り道を十番の選手は實に樂々と登つて行つた。勿論此の位の登りにはドライシユリットは使へない。下りに困難な箇處のない限り勝敗を定めるものは登りであらう。コルチナのやうな平坦な處でも矢張り登りの強さは大いに關係があると思ふ。

結果は豫想の如く美事優勝した。然しドイツは割合に振はずチエコが氣を吐いて居る。地元のイタリーは此の位で

我慢すべきであらうか。(瑞西は五十キロの競走を一度も
行つてないので此の競技には加はらない。)

順位	氏名	國	時間		
			時	分	秒
1	Lindgren, John	S	4	11	52
2	Wikstrom, John	S	4	29	57
3	Donth, Franz	T	4	34	54
4	Demetz, Matteo	I	4	51	51
5	Theato, Hans	D	4	53	06
6	Nemecky, Josef	T	4	54	01
7	Feistauer, Josef	T	4	57	04
8	Huber Ernst	D	4	59	07
9	Pellissier Dan	I	5	00	38
10	Toffoli, Antonio	I	5	01	09

典 ツ リ コ
イ タ エ
ノ イ チ
S D I T
D I T

此結果で見ると矢張りスカンデナビアは強いと今更驚嘆
させられる。諾威、芬蘭が之に加はれば他の國は更に下位
に甘んずべきであらう。諾威の不参加は瑞典との約束で兩
國が中央ヨーロッパでは同時に選手を派遣しないと云ふの
だ相です。

麻生兄は本大會には出席せず、サン・モリーツツの大會
の爲めグリーンデルワルドにて練習中。シャトー・デーで長

距離のテクニクについて不十分な點を見出して一層努力
するとの事です。同君の爲め慶賀に堪えません。

(二月五日)

第 二 信

五十キロの競技の結果を聞いたけれど餘りいつも中味だ
けをボツリ／＼とかくので讀む人には何の事かサツパリ分
らず又興味がのらないと思つて、大体のプログラムを遅蒔
き乍らかく事とする。

二月二日 午後六時、各國代表者並に各國選手の集合、點
呼、抽籤、コースの發表と五十キロの選手には醫師の

検査(一名不合格)

二月三日(第一日) 午前八時半五十キロ競走開始、午後九
時より數ヶ所のホテルにて舞踏會。

二月四日(休日) 各國代表、選手等の有志がジャウ峙に遠
足、午前九時に出發してケーブルカーで三百四十米突
許り高處に引き上げられて、更に二時間登つて此の時
に着く(二十米突) ラバ小屋でお茶の御馳走。F. I. S.
の Dr. Minelle (France) も御老体だがやつて来る。瑞

典のダネガー氏の如きは現役の勢。僕は本で有名ナル
ターター氏 (Dr. Luther) と一緒に歩いた。地味だが非常
に甘い。

峠はドロミーンテンを眺望するのに適して居る。天氣は
晴朗、林をぬけた後の直滑降のハヅむ事素晴しかつた
夜は代表選手の集合、歓迎の祝杯を上げる。

二月五日(第二日) 十八キロ、午前九時スタート、参加者
約百十名。午後は前日の峠と反対の方向にあるトレ・
クロチ (Tre Croft) と云ふ千八百米突の峠に行く。一
時間半許りスキーをかついで上る。

此の日はイタリー皇太子殿下も此の峠に御出かけて吾
々の一行が峠に着く廿分位前の處で直滑降で飛ばして
来る御勇姿に接した。峠の茶屋(實は大きなエレガン
トホテル)でお茶の御馳走になつてシバラク休む。

ユーゴスラビアの連中が多数で話が面白い。此の國の
連中は直に打とけて愉快だ「自分の國に來い、Gomilich
だよ」つて。それから北大のスキー大會に出席の招待
が來て一同大喜びした相だ。出來ない相談でも招待が
うれしいつて。

二月六日(第三日) 午前九時より複合競技のジャンプ。午
後二時からジャンプ競技。午後十時サボヤホテルで賞
品授與。それら無事解散の祝杯で幕。

右のやうな工合に大會は行はれ、僕はいゝ案配に退役の
代表者と云ふ譯で徽章は貰つて自由に場内に出入出来るし
大變面白く愉快に競技が見られた。

十八キロの日も晴天、殆んど無風、温度は氷點下五―六
度。コースは五〇キロのコース(即廿五キロの圓)を前後
縮めただけ。

此の競走も五〇キロと同じく縮具の共進會であつた。ス
テツキも長い短かいの色々だ。然しビルゲリーで勝つた
人はない。

Lindigen は此の競走にも易々と勝つた。スタートして彼
が登り初めた時後迂りして苦心して居たので今日は或は失
敗すると想像して居たが矢張り第一番にゴールに這入つた
抽籤で彼は今度も No. 10 であつた。ドント(チエコ)も
仲々よく走る。今度は二等になつた。スイス秘藏のルビは
蟻がよくなかつたのでよいタイムぢやなかつた。「十分以
上はそのために損した」と語つた。後迂りで苦んだらしい

ラングラフの成績は次ぎの通りその中○のあるのは複合
 競技として出場。

名	國	タ	イ	ム	
1 Lindgren	(Sd)	1	23	55	
2 Douth	(T)	1	29	42	
3 Schneider	(D)	1	30	47	○
4 Wikström	(Sd)	1	30	52	
5 Mueller	(D)	1	31	00	○
6 Huber	(D)	1	31	10	
7 Nemecky, O	(T)	1	31	21	○
8 Pellissier	(I)	1	31	57	
9 Nemecky J.	(T)	1	32	45	
10 Novak	(T)	1	32	51	
11 Feistauer	(T)	1	33	14	
12 Czech	(P)	1	33	31	○
13 Solleder	(D)	1	33	43	
14 Hörtnagel	(D)	1	33	53	○
15 Theato	(D)	1	34	38	○
16 Purkert	(T)	1	35	04	○
17 Wende	(T)	1	35	07	○
18 Bacher	(I)	1	35	18	
19 Rubi	(Sw)	1	35	21	○
20 Adolf	(D)	1	35	41	○

二月六日ジャンプ競技

ジャンプ臺は非常によく出来て居るが、少しアプローチ
 が着陸斜面の長さにして長すぎる感がある。臺の一番上
 から飛ぶと斜面の終り頃（六十米突近く）に落ちて非常に
 危険だと選手は話して居た。スタートは中段。

第一にオラフセン（諾威）が番外に飛んで三十七米突半
 次ぎを承はつたのがチェコのドイツクで四十二米突（此の

男は走るのが遅く第二回のジャンプに四三、五とんでよい
 成績だつた。

複合競技者中ドイツが走つたタイムでは優勢でバイエル
 ンのマイスター、ミュラーが或は一等になるかと思つたが
 彼等は第一回のジャンプに仆れて躓業も空しくなつた。そ
 の時は三十七米だつたから悪くはない。

ドイツのシュナイダーも同じくジャンプの距離が少なく
 （三十三、三十二）遂に優勝圏内に置かれない。そこへ行
 くとチェコのブルケルト（四十五、四十四）ネノツキ（三十
 八、三十九）の如きは素晴らしい飛行振りで競走者を完全
 に押へた。チェコのジャンパーは皆いゝ。特にヴェンデは
 タムスの面影があり安全であり手の振り方がゆるやかで立
 派なものだ。結果は

- 1 Purkert(T) 17.947
- 2 Nemecky, O.(T)
- 3 Wende(T)
- 4 Rubi(Sw)
- 5 Hörtnagel(D)
- 6 Czech(P)
- 7 Adolf(D)
- 8 Venzi(I)
- 9 Krzeptowski(P)
- 10 Dick(T)

ジャンプに勝れた人達が勝利を占めたのである。此の結果から見て今後のジャンプでチエコの活躍が思はれた。

午後二時すぎ伊太利皇太子殿下の御臺臨と同時に競走外のオラフセン（諾威）とカールセン（諾威）が飛ぶ。スタートは頂上の少し下。オラフセンは四十九米突。稍強みのない飛び方カールセンのは今年になつて見たジャンプの中では白眉、安定とその力強さや美しさで此の上のジャンプはあるまいと感嘆した。五〇、五である。殊に着陸の時に空中で前にかゝつて居る上体をグット起し胸を張つて（ムシロそりかへるが如くして）ショツクを軽くした事がハツキリと見へて嬉しい限りだつた。之でこそ着陸のショツクを少くして迂り面への分力を大きく出来るんだとうなづかれた。もう一つは前方の膝に上体胸がブツかるのも妨げるわけであらう。之は少しく飛んだ人がよく前膝を胸にあてる経験からして非常な参考であるまいか。カールセンは空中に出てシバラクして落下しかゝる頃、幾分か上体をかどめる。即ちタムスのやうな型にある。之は矢張り瑞西スキー年報に出た飛行の理論（山ミスキー参照）に合ふのであらう。ジャンプの理論が飛行機の理論に會つたのは嬉しい。

僕も此のジャンプを見めて初めてジャンプらしいものを今拜見した。カールセンがアトの二回（五十四米突）轉んでも此の一回で同氏の非凡さに三嘆した。（仆れた時に何の苦もなく、丁度吾々が普通のスロープで轉んだ時のやうに仆れさうして起きたには、矢張り一驚した。）

競技者として先陣を承はつたのが伊太利のフィンユ（四十一、五）別段のジャンパーではない。次ぎがチエコのデイツク（五〇米突）よいフォームである第二回が四十三米五と云ふ比較的少ない飛行距離で二等になつたが、チエコの爲めに氣を吐いた。次ぎがナイヤー（獨、四十六米突）よく覺えて居ない。獨乙から來たジャンパーは自立つ程の人が居ない。皆中庸と云ふ處である。一番僕の記憶に深いのはチエコのヴェンデの飛行である。空中に出ると徐々に上体を前に向け、靜かに手を振り（誰かタムスを形容したやうに鳳が大きな翼を擴げて飛ぶやうに悠々と）飛ぶその落ちつきその安定、こんなのを見るとジャンプなんて樂なもんだと思ふ。比較的距離を長く飛はない。（但しアウサー、コンクレントに一番テツペンから飛んで五十四米三を出した）此の男はタムスにそのフォームが似て居るが顔

なんぞチツトも似てやしない。

又チエコのブルケルトもよく飛ぶ。先づ第一回に五十二五とんでその回の最長不倒距離を出したが、第二回で五十四とんで仆れた。惜しい事の極みだつた。之で失格したのはかへすがへすも残念だらう。若しも不安定乍らも立つたら一等は必定であつたから。同選手も少し前にかゝる。先づ當大會ではカールセンに亞ぐ豪の者だと思ふ。瑞典のエドマンもよいジャンパーだ。同選手は四六、五と五十四と飛んで第一等となつた。此の第二のジャンプが千金の價で之一つで第一等の名譽をかち得たと見てよい。それほど甲乙の區別少ない場合には最長不倒距離を出した人に有利である。無論フォームで減點されて距離が多くても下位の人が随分ある。(例へば此の前に瑞西でカールセンが第一位ではあつたが距離は二等の人より少ない。カールセンの飛び方を見れば神品だから少し位餘計飛んだつて彼より優れてるとは云へない氣がする)

ジャンプの一人々々に云ふ事もないし結果を記せば諸兄に早解りと思ふから左に。距離は伊大利語だけで知らせるので随分よわつた。然し大抵あつてつてもり間違つてたら

又知らせる。矢張り廻轉盤で告知する必要がある。

Edman, Tore (Sd)	46.5	54.0
(18.420)		
Dick, Wilhelm (T)	50.0	48.5
Karlssen, B. (Sd)	44.0	51.5
Fenz, Ernst (Sw)	49	48
Wende, Franz (T)	46	49
Venzi, V (I)	49.5	49
Schmidt, Sepp (Sw)	44.5	48
Neyer, R (D)	46	48
Recknagel, E. (D)	48	46.5
Zampatti, L. (I)	38.5	?

賞品授與式は少し定刻からおくられてダラシのないものとなつたが目出度濟んだ。複合競技に二等までキリ賞品がなくジャンプに六等まであつた。五〇と一八キロは各五等迄國別にして考へると複合競技は三等迄全部チエコ、次ぎがスイスモドイツ、ジャンプは六等が黒シャツの兵士、それで想像する人は御勝手に願ひ度いと云ふのか、各國の人連は色々に考へる事だらう。

かゝる會としては少し常規を逸して居ると考へられる。之からサン・モリスツツのオリンピックアシャンツエを見に行きます。あの邊の精しい地形圖は何かの參考になりませうから送ります。(二月八日)

彙報抄録

ポントレデナのジヤムプ大會

二月十五日

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1. Lanener, Stephan | 17.249 (57. 58. 60) |
| 2. Schmidt, Sepp. | 17.138 (57. 62. 60) |
| 3. Koch, Florian | 17.027 (57. 58. 59) |
| 4. Rabi, Adolf | 15.916 (54. 53. 58) |
| 5. Willeunier, Gerard | 15.611 (64. X 66) |

H. U. S. V. 新着圖書

British Ski Year Book 1926.

Der Wint. 20jahrgang 5. 7. 8. Heft.

山 岳 (奥羽號第一) 日本山岳會

キャンピング (三月號) ジャパンキャンピングクラブ

山 嶺 (三月號) 東京野歩路會

謹告

第七拾二號は五月一日發刊の豫定を都合に依り變更して六月一日に倍大號として發行することに致しました、ついでには五月は發行を休みますから右豫め御諒承下さる。

四月一日

山とキス

編輯

と非常に密接な関係にある。踏み切りのことは次章に於て詳述したいと思ふ。

附 記

以上が大体アプローチの説明です。是を一讀しますと、大体私共が今迄考へて居て、そしてやつて居た事が、さ程誤つて居らない。氏の説明に近いものであつたことを知りました。アプローチでの滑走及姿勢は、要するに傾斜の工合、斜面の雪質状況、滑走速度、体の均衡保持、屈身姿勢、正確なる意識、沈着なる態度スキーの嚴重な調査等々に充分留意することが簡要のことと思はれます。

尚私が本文中で使用した特殊の言葉の索引をつけて置きます。

便宜日本語	英語	獨逸語	諾威語
ジャンプ又はスプリング	Jump, Jumping	Sprung(m)	Hop
ジャンプア、飛躍者	Jumper	Springer(m)	Löper
ジャンプテクニツク又はスプリングテヒニイック	Jumptechnic	Sprungtechnik (f)	—
ラングラウフ又はテイスタンスレース	Distance-race.	Langlauf (m)	Langrend
アプローチ 又はアンラウフ	Approach.	Anlauf(m)	Tillöpet
屈身姿勢又は ホツケステルング	Crouching down.	Hockstellung (f)	—
ジャンツエ又は飛躍臺	Take-off	Schanze(f)	Hoppet
サツツ又は踏み切り	Leap	Absprung(m)	Sats
ダレンテ滑走 又は山野滑走	Cross-Country	Geländefahren(f)	—
水平ニスル	Flat	Flattern	—

ドクトル・バーター、ハンス・シユネーベルゲルは人名。
モデルネ・シースホルツ、ウンデル・デス・シユネーシユウー、
スプリング・ウント・ラングラウフは書名。

これは一方に於て速度を大にし、空氣の抵抗を小にし、他方に於ては充分の踏み切りをする様な姿勢に近づける利益がある。

次にジャムバアは速度が加はつて來たならば、可及的有効な屈身姿勢に移つて行き、そして空氣の抵抗を有効に扱ふ。

踏み切りの瞬間では、上体を強く前方にかけねばならないから、アプローチの滑走中に屈身姿勢を餘り深過ぎないやうに、そして上体を軽く前方にかける。

註、体重を後ろにかけて深い姿勢をとつてアプローチの滑走をすれば、速度は増すが、踏み切りの際にうんと正しい時期に、正しく前方にかゝることが出来ない。この姿勢は危険があるからよくない。

アプローチでは普通のゲレンデ滑走の時の様に斜面の不整なことがあり易い。これは兩膝を弾性的に伸曲することによつて、亦一方の足を僅かに前方に押し出すといふ僅かの注意力で、多くの場合斜面の事情に應じて矯正することが出来る。特に体を僅かに後方に残すことによつても亦拒ぐことが出来るであらう。然し此際可及的兩膝及び兩スキーを、互に離さぬやうに心掛けねばならない。若しも滑走斜面が大へんグラツトであるならば、此方法に従つて例外なしに榮に滑走することが出来る。そして落着いた姿勢で、揃え合され兩スキーの保持に特に腐心することもなく又横滑りの心配もなく、つまり専門語で呼ばれて居る如く“Flatturn、”（水平にする）ことが出来る。

尙又平行に保つてある兩スキーを少々互に引き寄せせるが良い。その時は兩膝を閉ぢるやうにする。かくして兩スキーを樂に内陵で揃へ合することが出来るやう。この姿勢は無論制動するが、滑走の困難な雪質状態にあつては、非常に良い滑走法である。大抵一般スキー術に優れて居る人が、大シャンツェに行つてジャムプをする際に、この姿勢の利益によつて落着を拂つた滑走することが出来る。

アプローチの斜面の一方に傾斜して居るさか、又は波打つて居る様に凸凹になつて居る様な時は、ゲレンデ滑走の時の様に充分注意して、幾分膝を開いて滑走する。たゞ此時次のことに注意せねばいけない。

体重の均衡を保つこと。

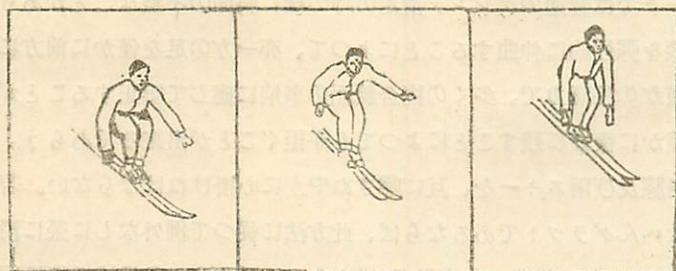
シャンツェの手前では再びスキーを揃へ合はすべきこと。

シャンツェ上で自らの役を果すアプローチの部分は、次の動作である踏み切り

ムバアの足より1—1.5米位下方に立て雪中に強く押しつけて支へる。上方のスキーを略々滑走方向に向け、内陵を立て体重は同側の杖に倚りかける。下方のスキーも亦、他側の杖の力を借りて引き寄せ兩足を揃へ、そして杖を離してジャムバアはアプローチへの滑走をする。

非常に熟練なジャムバアは滑走方向に向つてジャムプターンをすることが出来る、然し是はジャムプスキーの長さや重さに關係が大で、餘り賞揚することは出来ない。

それはスキーのテールが雪中に引つかゝらぬやうにする爲に、強く、高く蹴上げねばならないだらうから。そして尙又急斜面の處では、いきなりスピードが出



斜面の状態、滑走速度及び滑走時期に適當したるアプローチの姿勢

るし、それがしかも大抵の場合僅かの時間に来るものであるから、滑り出しの不安定は、シャンツエまでの滑走に容易に影響を及ぼし得るものである。

熟練して來れば、修理されて居らないアプローチに於ても、杖の助力によつてアプローチの滑走速度を増すことが出来る。然しその場合吾々は、均衡を失はぬやうに注意せねばならない。ジャムプ競技では、一般に杖を使用してはいけないことになつて居る。

最良の方法は、先づ第一にジャムバアは兩膝を閉ぢて正しい姿勢で滑走することである。つまり一足を他足よりも僅かに前出して、普通の滑走の時様に滑走する。兩スキーに平均に体重をかけ、平行に揃へつけて滑らねばならない。

アプローチの間では、体を樂に伸ばして、疲れぬ様にする。このことは長いアプローチの滑走を有するジャムプ斜面では特に大きな價值をもつものである。そしてアプローチの滑走中に次第に Hockstellung (屈身姿勢) をとる。

譯述はなるべく原文に忠實に致しましたが、譯語では今私共仲間が常用して居る言葉
をそのまま日本讀みにして書いて居ります。中にはドイツ語を日本式發音讀みて、又英
語を日本式發音讀みてやつてのけたりして居りますから、讀者諸君何卒御諒承下さい。

原著は前述の様に Dr. Baader u. Hans Schneeberger 兩氏共著 „Wunder des Schnee-
schuhs IIte Teil, „Sprunglauf u. Langlauf.“ であります。(譯者)

已に前述せるスキージャンプの本質についての綜合から、如何なる重要事項が
アプローチにあるかを此處で考案しやう。そして更に尙ほ私は踏み切りが空中飛
行に際して正しい位置を体に與へ、同時にジャンプバアを可及的遠距離に目指さし
むるものであることを附言するであらう。そしてこの目的を達するには一つの落
着いたそして安定なアプローチの滑走が是非共必要である。夫れ故吾々は此處に
ジャンプバアがアプローチに於て注意せねばならぬ二つの主要點を持つ譯である。

飛躍者は落ちていて安定な滑走を爲して、そしてアプローチのスピードを減ず
る様な凡べての悪い要素を除くべきである。此アプローチのスピードはジャンプ
競技に於て本質的に重要な價值を持つものである。即ちそのジャンプ競技に際し
て、到達せる距離は決定的のものである。然し乍ら尙又アプローチで制動的滑走
を試みるならば、滑走を不安定にするものである。而も此制動的滑走の起り得る
ことを等閑にされ易い。同様にアプローチの滑走を早める目的から、次の様な事
柄を爲すことは餘り良くない。即ち、補助疾走(補助的にトントンと駆け出すこ
と)飛び出すこと。

是等の動作は滑走を制御するものであり、多くの場合無意義であり。且又是非
アプローチの滑走で必要な体の均衡を甚だしく破る傾向がある。

吾々は第一に、滑走を始めるに當り直立の姿勢から如何にして正しき滑走方向
をとるべきか、その最良の方法を究考する。

出發地點が水平の場合なら、ジャンプバアはその位置から落ち着いた姿勢をとつて
滑走することが出来る。即ち自然の儘に出發することが出来、少しも困難を感じる
ことはない。簡單に兩スキーを滑り出さすのみで兩スキーは一人手に滑る。

僅かに傾斜して居る場合にあつても、極く簡單に滑り出して行けば宜しい譯で
何等の痛痒を感じぬ。問題は急傾斜の場所すら正しく滑走し出す場合にある。

此場合に最良の方法は、兩杖を補助に使用するこゝである。兩ストックをジャ

スキーテクニツクの研究

スキージャンプの アプローチの姿勢と滑走法

著者 ドクトル・バアター
ハンス・シュネーベルゲル
抄譯 廣田戸七郎

ジャンプテクニツクの内のスタートからシヤンツエまでをアプローチと私共は言つて居ります。言葉にはノールウェー語で“Tilløpet,”、ドイツ語では“Der Anlauf,”、英語では“The Approach,”などいろいろに言ひ表はされて居りますが、日本では未だ確定した言葉がありませんが、近頃では英語を字義の讀みのまゝにアプローチとして、言ひならはしけて居りますから、此處では標題をこの様にとつて譯述をして参ります。

近頃スキージャンプの技術も追々複雑になつて参りまして、私共の貧弱な体験がなかなか外國の進歩の素張らしさに追いつき兼ねて居ります。然し此處一、二年すれば私共の程度も（机上の考察だけでなく）實際の技術練磨で、世界のレベルへ歩みつけるんぢやないかと考へられます。

私は昨年、ドクトル・バアター氏及びハンス・シュネーベルゲル氏共著のスプルングとラングラウフの文獻を手にすることが出来たので、又新しい事でも言つて居るのか、或は是迄吾々の已に考へて居た様なことが書いてあるのかと思つて、讀み乍ら、そして暇に任せて書き寫して置いたものを今此處に記述しやうと云ふのです。

今世界的にスキースポルトの専門的研究文獻としてスプルングとラングラウフとのみを書いてあり、しかも最新のものでは例の“Moderne Ski-Sports,”と今私が手にして居るドクトルバアターの著の二つが、代表的なもの様です。無論或はドイツ邊に未だ其後此方面の良著が出て居るかも知れませんが是は私の知つて居る程度です。

尙ジャンプの最新理論的文獻としては、一九二六年の瑞西のスキー年報にあるストラウマン氏の記載であります。是は山とスキー誌第六九號から長友青木君が詳述して居りますから御一讀下されば慥かに其道の研究家に新智識を與へることとせふ。

海外殊にドイツ邊でのジャンプのフラインクの技術の働きがどうであるかは、スキーの私共の親友麻生武治君が又同誌に寄稿せられて居りますから、御一讀願へれば直ぐに氷解せらるゝことと思ひます。

GET SUPERFINE SKEES.
 AND MAKE AN
 EXCELLENT
 RECORD!



優秀ナスキー用其具

小樽

梅屋運動具店

自信ある本年度製作品

SKI HEIL

スキ一

ト

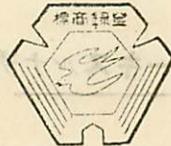
其用具全般

中野商店

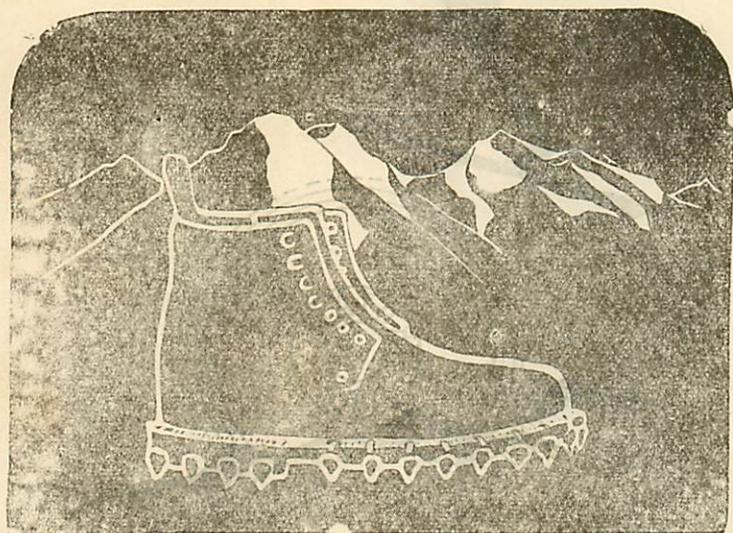
スキー即ズバ

一産
一製
一量
一製
一製
一製

札幌



テ於ニ會覽博藝工産畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

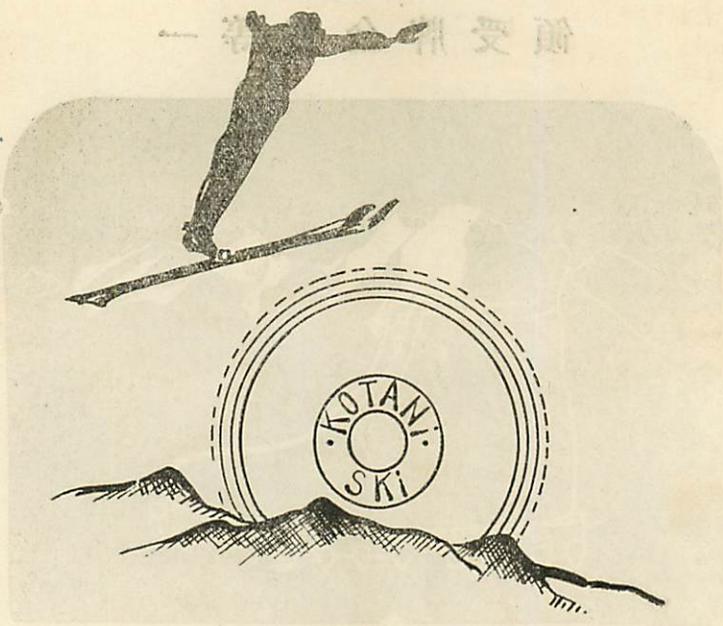
角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

第二回帝國工藝博覽會ニ列ス
一等金賞受賞



の店弊るあ評定るな秀優
具用ツ一ポストアタニウ

札幌市

小谷運動具店

南一条

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下さいんことをお願ひします又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、O・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雑誌の代價は頂きます。

昭和二年三月廿八日印刷
昭和二年四月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 山 口 健 兒

印刷兼 發行者 廣 田 戸 七 郎

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北五條西十一丁目二番地

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 71. Aprilo 1927. Sapporo. Japanujo.

美滿津製冬季運動具！



— 型錄進呈 —

TOKYO 合名會社 HONGO
美滿津商店

東京・本郷・赤門前・電話・小石川・八四五・二〇七・番

大正五年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和二年三月廿八日印刷
昭和二年四月一日發行

山とスキー 第七十一號

定價金參拾錢